The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	寺尾東海の韻学と荻生徂徠
Author(s)	岡島, 昭浩
Citation	語文. 2010, 92-93, p. 90-99
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69141
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

寺尾東海の韻学と荻生徂徠

岡島昭浩

一

荻生徂徠に『韻槩』という書があり、『荻生徂徠全集』（筑摩書房）第二巻に収められている。同全集の解題（戸川芳郎）には、『韻槩』は、写本で伝わっていて、刊本は見ない。現在、調査しえた伝本は、二本。

一は、関西大学図書館泊園文庫に蔵する一本（以下、「泊園本」と略称）。

二は、国立国会図書館に蔵する一本（以下、「国会本」と略称）。

とある。

ところが、この『韻槩』について、

近有一盗僧、使其徒遊余門、学要略、而潛竊其秘、以雑喰囈、題以韻槩、云物茂卿所著、以誑世俗、易而求高価、又更改題目、云己所述、以驕於人、可謂譸張為幻矣、不啻譸張為幻、所雑之喰囈者、大賊夫人之子。

ということを書いている文献がある。すなわち、ある人の学説を徂徠の『韻槩』であると称して（「喰囈」は寝言）高く売り、世俗を誑かしている盗僧がいるというのである。

そう言われれば、徂徠の『韻槩』は、江戸時代の書籍目録類に見えず。韻学書を列挙した文雄『磨光韻鏡余論』にも見えない。文雄は、

眼之所経載于此。尚恐有遺逸上来三十六家四十八部計一百五十許卷。

と、韻学書の収集に努めており、太宰春台と交渉があったのだから、徂徠の韻学書があれば手にできたのではないかと思えるが、見ていないようなのである（後掲の年表のように、現存「韻槩」識語は文雄が江戸にいたころである。『韻槩』の識語は享保九年で、徂徠は享保十三年に亡くなっている。）。

徂徠に『韻槩』の書のあったこと自体は、服部南郭「物夫子著

述書目記」（宝暦三年記）に見える（後掲年表参照）。

琉球聘使記一巻、幽蘭譜抄一巻、琴学大意抄一巻、文変一巻、韻槩一巻、満文考一巻、葬礼略一巻、詩題苑一巻、南留別志五巻、広象碁譜一巻。右十部一時戯作又小而辨物爾、不必当弘行者

徂徠に『韻槩』という書があったのは南郭の記録により伺えるのであるが、はたして現存の『韻槩』が、徂徠の書いたものであるのか、それとも、徂徠に仮託した別ものであるのか、考える必要があろう。

二

前掲の文は、『解経秘蔵要略』という書に見えるものである。このあと、

夫浪華者、天下四通之地也、盗僧唱之、其徒和之、則毒流於四海、余不忍恝然見之、因欲刻解経秘蔵、公諸天下、以発其贋、而無稟裝之供其費、今聊称貸、先刻要略、自隗始云爾。

と続く。この序文の筆者であり、この著の著者であるのは、「讃州　東海　寺尾正長字子長」である。この人物については、『浪華郷友録』（安永四年版）[1]に、

寺尾伊織　土佐堀玉水町

源正長、字は子長、東海と号す、又扶桑園と号す、音韻学に精し

とある。

『解経秘蔵要略』は、この序文の書かれた天明元年に浪華書誌大野木市兵衛（彫刻　川崎忠蔵）によって刊行されている（榑桑園蔵版）。内容は、

六書、字体変更、音韻、吸音律図、呼音律図、四声、四字一紐、或六字一紐総帰一入、五音、五音清濁、五音相通音、天地自然五音総括図、字音軽重兼備、韻母、八十四韻目、十二疇序、直音訓序、正直音訓、傍直音訓、同音訓序、正同音訓、傍同音訓、類同音訓、協同音訓、同韻訓序、正同韻訓、傍同韻訓、音義二合訓序、音義二合訓、合音訓序、合音訓、同字訓序、同字訓、借義訓序、借義訓、古音徴、四声動声訓、

からなる。大阪図書出版業組合『享保以後／大阪出版書籍目録』（一九三二八）には、

解経秘蔵要略[2]　一冊

作者　寺尾伊織　江戸堀一丁目

板元　秋田屋市兵衛　安堂寺町五丁目

出願　天明元年閏五月

許可　天明元年七月七日

とある。他に、この目録には、

韻鏡古音正図辨[3]　二冊

作者　寺尾伊織　玉水町

板元　吉文字屋市兵衛　木挽町中之町

板元　河内屋喜兵衛　南久太郎町六丁目

出願　安永三年十一月

許可　安永三年十二月十一日
陰符経摘玄
作者　寺尾東海　農人橋一丁目
板元　藤尾弥兵衛　高麗橋一丁目
出願　天明八年八月

を載せる。

『韻鏡古音正図』は、国会図書館のみに蔵されている。整版本であるが、書肆名は手書きで書き入れられている。上巻が「韻鏡古音正図」、下巻が「韻鏡古音正図辨」である。下巻の内容は、

題例三章　正圖辨　韻母辨　内外轉辨　開合辨　五音辨　七音清濁辨　四聲辨　字母辨　華音辨　軽重横呼辨　反切辨

である。

前掲の要略序文に資金不足で出せなかったとある『解経秘蔵』は、天明五年に刊行されている。[4] 三巻からなり、巻上は「要略」を増補したもの。巻中下に韻鏡四十三転を改訂した四十八図を載せる。中巻が二十六図あり撥韻尾を持つもの、下巻が二十二図あり撥韻尾のないもの、となっている。

巻上の内容は、東海寺尾正長の安永四年の序に続き、石井一貫の天明五年の序（後刷には、寛政八年の羽富謙伯益の「解経秘蔵大旨」がある）[5] のあと、

六書、形声論、仮借論、字体変更、音韻、四声論、四字一紐、或六字一紐総帰一入、五音、五音清濁、五音相通音、天地自然五音総括図、字音軽重兼備論、韻母論、合韻八十四目、十二疇、正直音訓、傍直音訓、正同音訓、傍同音訓、類同音訓、協同音訓、正同韻訓、傍同韻訓、音義二合訓、合音訓、同字訓、借義訓、古音徴、四声動声

であり、『要略』とほぼ共通するが、『解経秘蔵』には、徂徠などの名や剽竊のことは見えない。

『国書総目録』未載のものとして、九州大学文学部蔵の『三音矩』がある。写本、大本二冊で上下二巻、上は墨付37丁、下は18丁、上巻巻頭に、

嶋昌永
東海新先生著　浪華　蕃右美　同校
青喜平

とあり、下巻巻末の跋文に「安永元年之春　新正秀識」と見える。本文中に「余が韻鏡古音正図」とあるところから、寺尾東海の著に間違いないが、この識語の時点では、韻鏡古音正図は未刊であった。この書には、

京師の沙門文雄と云者、春台先生に従て音韻を学で磨光韻鏡を著せり。其三音を見るに正音を知ることなし（上7ウ）

など、文雄への攻撃が多く、太宰春台についても、

台翁は徂来先生に従し故、経学は少く美なれ共、韻には甚疎き人也

としているが、徂徠の韻学についての言及はない。

なお、東北大狩野文庫蔵の『説文字母考』は「南宮隠士貫道南宮金閣主人貫道補遺　寺尾正長子長学」とあるもので、韻学

に関する言及は見あたらない。静嘉堂文庫蔵の『用辞則』は未見である。

徂徠のものでもなく、東海のものでもないが、本稿で示すべき文献として、『唐韻指迷』というものがある。これには、徂徠の韻学についての言及がある。湯沢（二〇〇六）で、『韻槩』について、「後の書にこの書の名前が現れているという報告を聞かない」としているが、この『唐韻指迷』は、書名こそ出てこないものの、「徂徠翁」とあるものは、『韻槩』に見えるものである。『国書総目録』では、「大阪出版書籍目録による。」とするのみ。岡島蔵。小本一冊。寛政己未十一月、蘆洲小田真卿序、尾形貞斎自序。内題には「摂城後進 尾形居平貞斎述」とある。『大阪出版書籍目録』にも、

唐韻指迷　一冊
　作者　尾形貞斎　古金町
　　河内屋太介　雛屋町
　願　寛政十一年十月
　許　　廿七日

とあり、内容は、

音韻探正之辨　四声之辨　附唐音相通例　内外転軽重秘圖　内外転軽重秘訣　五音之辨　協韻之辨　入聲字転平例　唐韻秘訣　唐韻秘伝　国字韻鏡反切之口訣　漢音反之訣　唐韻雅俗之辨

というものである。著者の名は、通俗西遊記の翻訳者の一人として見られるものである。序を書いている小田真卿は、『浪華郷友録』寛政二年版に、

田真卿、字淳夫、号蘆洲、順慶町壱丁メ、小田貞庵

とみえ、三沢諄治郎『韻鏡諸本並に関係書目』で「韻学図解」「韻学蘊要」（ともに、三沢氏蔵）、国会図書館蔵の『韻鏡一家言』が載せられる。

『韻鏡一家言』は巻末に天明六年とある写本である（門人山中豊子亨校）。内容は、

漢音呉音、五音七音、五音総括図、四声、韻母、字母、内転外転、清濁、軽重、開口合口、経史音釈、反切弁解、反切名義、反切頌、反切五法（音和、双声、畳韻、類隔、往還）、駁六例（寄声、寄韻憑韻、広通偏狭、憑切）

である。『日本漢字学史』でも言及されるように、徂徠の名が、「本邦近歳徂徠先生春臺先生ありて最も韻學に精しく音釋も殊に詳かなり」[6]とある程度だが、後に引くように、『韻槩』『解経秘蔵』と通じる部分がある。

三

さて、『解経秘蔵』（ならびに『要略』）には、中国古典における訓注を分類した、「十二疇」というものがある。『解経秘蔵』によれば、次のようである。

正直音訓　五音清濁韻母輕重皆同
傍直音訓　五音清濁輕重皆同、而韻母相通
正同音訓　在四字一紐中

傍同音訓＊　五音清濁呼吸皆同。而傍紐
類同音訓　五音清濁皆同。而呼吸異紐
協同音訓＊　不問呼吸。唯五音同。而清濁異紐
正同韻訓　不問五音清濁唯軽重同。而列于一韻母
傍同韻訓　不問五音清濁唯軽重同。而列于通韻母
音義二合訓　一字兼二義者。以二字訓之
合音訓　二字存一義者。以一字代之
同字訓　不仮他字音韻訓釈。直用其本義
借義訓　不借音韻唯借同義訓之

（「＊」については後述）

これが『韻槩』の「十觿」と、よく似ている。「正直音訓」と、『韻槩』で、それに対応する「経正音法」を並べてみる。

易曰。晋者進也。進必有所傷。又曰。嗑者。合也。物不可以苟合而已。又曰。離麗也。日月麗乎天。論語曰。政者。正也。子帥而正。孰敢不正。孟子曰。征之爲言正也。各欲正已。又曰。仁也者人也。合而言之道也。又曰。洚水者。洪水也。又史記作鴻水。

『要略』

易曰。晋者。進也。又曰。離者。麗也。又曰。嗑者。合也。禮曰。仁者。人也。又曰。刑者。侀也。論語曰。政者。正也。孟子曰。征之爲言正也。又曰。洚水者。洪水也。

右五音清濁。韻母軽重。皆同。名曰正直音訓。『解経秘蔵』

易曰。晋。進也。嗑。合也。離。麗也。論語曰。政者。正也。孟子曰。征之爲言正也。又曰。洚水者。洪水也。【史記作鴻水。】又曰。仁者。人也。【又出中庸。】

右経正音法【五音清濁軽重。韻母。皆同者。以是相訓。】『韻槩』

上記のように、挙例も含めて似ている。「正直音訓」「経正音法」以外について、その対応を示すと次の通りである。

『韻槩』十觿　　『解経秘蔵』十二疇

一、経正音法　　正直音訓
二、経旁音法　　傍直音訓
三、経同音法　　正同音訓
四、傍同音法　　類同音訓
五、緯正韻法　　正同韻訓
六、緯傍韻法　　傍同韻訓
七、音義和合法　　音義二合訓
八、合音詁法　　合音訓
九、同字詁法（直用本訓）　同字訓
十、借義詁法　　借義訓

「傍同音訓」と「協同音訓」が、『韻槩』にはないわけである（十二疇を挙げた際に＊を付しておいた）。

四

次に、四声の条を見る。『韻槩』で、

平上去入。謂之四聲。四聲之出。猶四時之運。音韻均呼。無有低昂。謂之平聲。韻昂於音。謂之上聲。韻低於音。名之去聲。韻尾迫断。名之入聲。四聲之等。韻異音同。故謂之四聲一音。四聲以音紐之。故名之四字一紐。四聲之名。雖起乎沈約。然其實在古。徴之毛詩老子韻。大弓四聲各存。唯古之用聲。非如後世韻書限之者。且如舌字。古有平音。今唯入聲。其義見説文。釋名亦論之。可以観已。

とある部分が、「解経秘蔵要略」では、

平上去入。謂之四聲。四聲之出。猶四時之運。音韻均呼。無高卑。謂之平聲。韻高於音。称之上聲。韻卑於音。名之去聲。韻尾短促。号之入聲。四聲之位。韻異音頭同。故謂之四聲一音。四聲以音頭紐之。故又謂之四字一紐。（中略）四聲之名。雖出乎沈約。然其實在古矣。六経諸書韻。大抵四聲各存。（中略）古之用字。通于四声協於五音。非如後世韻書限之者。（中略）又如舌字。古與巻字通。今唯入聲。世儒何知與巻通平声也。知者惟劉熙許慎耳。

『解経秘蔵』では、

平上去入。謂之四聲。四聲之出。猶四時之運。音韻均呼。無高卑。謂之平聲。此春之气也。韻高於音。称之上聲。此夏之气也。韻卑於音。名之去聲。此秋之气也。韻尾短促。號之入聲。此冬之气也。四聲之位。韻異音頭同。故謂之四聲一音。四聲以音頭紐之。故又謂之四字一紐。（中略）四聲之名。雖出於沈約。其實在乎古矣。六経諸書韻。大抵四聲各存。（中略）古之用字。通于四声。

また、『韻鏡古音正図』でも、

平上去入。謂之四聲。四聲之出。猶四時之運也。調音貴其和平。故初發声為平声。斯春之気也。高呼猛烈強為上聲。斯夏之気也。過去哀遠為去聲。斯秋之気也。短促急収蔵為入聲。斯冬之気也。

となっていて、多くの部分で共通している。『唐韻指迷』には、

徂徠翁曰、音韻均呼。無低昂。謂之平聲。韻昂於音。謂之上聲。韻低於音。謂之去聲。韻尾迫断。謂之入聲。

とし、

是実に骨髄の説。諸子の説く所に似ず。

と評価している。

小田真卿『韻鏡一家言』には、

平上去入。名之四聲。四聲之出。猶四時之運。音韻均呼。無低昂者。謂之平聲。韻昂於音。謂之上聲。韻低於音。名之去聲。韻尾迫断。名之入聲。（中略）。四聲之等。韻異詩音同。故謂之四聲一音。或縦呼一音也。四聲以音紐之。故名之四字一紐。

とあるが、『解経秘蔵』とも『韻槩』とも書かれていない。

さて、このような四声の記述は、康熙字典に引かれることで知られる、

平聲平道莫低昂、上聲高呼猛烈強、去聲分明哀遠道、入聲短促急收藏

との関連があると見られる。上声や去声については、より具体的に示されている。すなわち、上声は「韻が音よりも高い」というのは、上昇調であることを示し、去声が「韻が音よりも低い」というのは下降調であることを示している。[7]『唐韻指述』では、康熙字典の記述を引いた上で、それらに比して徂徠の説を高く評価している。康熙字典に引かれる上掲の記述自体は、唐宋の頃からであろうと言われるが、[8]これが日本で知られるようになったのは、康熙字典に載せられてからであろうと思われる。『韻鑑古義標註』の補遺巻（元文三年）に

康熙字典云、平聲平道莫低昂、上聲高呼猛烈強、去聲分明哀遠道、入聲短促急收藏

と引用されるのが早いところではなかろうか。その後、『磨光韻鏡』でも引用される。このように四声の調値を漠然としたものであっても示したものは少なく、これの他には、『元和韻譜』の「平聲者哀而安」のような、高低を示さないものしかない。[9]

康熙字典は、康熙五十五年の成立、日本の享保元年にあたる。享保五年には日本に渡ってきていたようであり、[10]享保十一年の『韻鑑古義標註』でも利用されており、[11]「享保九年甲辰八月」（一七二四年）という「韻槩」（徂徠の歿は享保十三年）に引かれているのは、不可能ではないが、かなり早い影響と言うことになる。しかも、そのまま引くのではなく、影響を受けたというような形になっているのが、気になるところである。

いくら、徂徠が唐音を学び、唐音で経典を読むことを薦めたとはいえ、自身で唐音を観察したことだけから四声の上がり下がりを記述した、というのも考えにくい所である。韻書の四声と現実の声調との対応関係は単純なものではなく、もし現実の声調を記述するのであれば、例えば、陽平と陰平についても言及があるはずである。徂徠学派に唐音を教えた岡島冠山も四声については、韻書の四声を示すだけで、当時の声調や、その上がり下がりについての言及はない。

五

『韻槩』の「国会本」では、本文の後に、図が十一ある。これは、韻鏡古音正図と対応している。

○韻槩附録	○韻鏡古音正図
内転第一	内転第一
内転第二	内転第二
（なし）	内転第三
内転第三	内転第四
内転第四	内転第六
内転第五	内転第七
内転第六	内転第五
外転第一	外転第一
外転第二	外転第二
外転第三	外転第三

外転第四　外転第四
外転第五　外転第五

他の荻生徂徠の韻学書としては、湯沢（二〇〇六）も指摘するように、

○「韻鏡抄」（『片玉集』八十五　宮内庁書陵部蔵、津村正恭編、安永～寛政）国文学研究資料館マイクロフィルムによる
直音拗音図、五音五位次第、七音総括図、三十六字母帰納助紐字、韻鏡帰字例、六対十二反、五音（開奩に出）、韻鏡頭書（大田氏作）

○「蓼園遺編」巻之四　『荻生徂徠全集』第十八巻[12]

といったものがあるが、『韻槩』との関連は見出しがたい。[13]

六

以上、荻生徂徠と寺尾東海の韻学について比較してきた。徂徠は著名な人物だが、東海は無名である。単純に見ると、徂徠の韻学を東海が真似たものとみることも出来そうだが、『解経秘蔵要略』の序文に言うように、東海の韻学を徂徠の韻学であると誰かが偽った可能性もあるように見える。

もし、「韻槩」が徂徠の考えを伝えるものであったとしても、寺尾東海や尾形貞斎、小田真卿等の書は『韻槩』の異文を伝える資料としての価値を主張することが出来る。

呉音者。呉人沈顧所呼。唯牙音次濁有之（誤脱アラン【徂徠全集校者の付記】）。此風土之所致。莫如之何已矣。牙音次濁。自同于唇喉次濁。呉人以喉音全清呼之。其説見韻會。（韻槩）

呉音者。呉人沈約所呼。惟牙音次濁有之。韻会韻例曰。呉音角次濁音。雅音羽次濁音。是也。牙音次濁正音。自同于唇喉次濁。以喉音全清呼之。其説見韻會。（解経秘蔵要略・音韻）

呉音者。呉人沈約所呼。比諸漢音自不正矣。故不正音者。総称呉音。牙音次濁必有呉音。牙音次濁正音。自同于喉音次濁。以喉音全清呼之。斯呉音也。（解経秘蔵・音韻）

呉音者。呉人顧野王沈約所唱。唯牙音次濁有之。韻会音例曰。呉音属疑母字、廼雅音属喩母者。呉音角次濁音。雅音羽次濁音。是也。此呉人水土之所致。不知然而然耳。按牙音次濁音。自同于唇喉次濁音。（韻鏡一家言）

というように、徂徠全集の校訂に於て「誤脱あらん」とされた箇所の異文を見ることが出来るのである。

『唐韻指迷』には、他にも『韻槩』の影響下にある部分がある。

徂徠氏曰、字音清濁あり、軽重あり。此を知らざる時は曚昧たり。

これは『韻槩』の「六則」によるものである。

同じく、「徂徠翁内外転軽重音秘訣[14]」は、『韻槩』の「韻母通韻

図」（徂徠全集の六七六～六七七頁）に相当する。

略年表

1716　享保元年　康熙字典刊
1724　享保九年八月　韻槩識語
1726　享保十一年　文雄、江戸を離れ京都へ
1728　享保十三年一月　徂徠没
1744　延享元年　春台による磨光韻鏡序
1753　宝暦三年　荻生徂徠『中庸解』版本巻末「物夫子著述書目記」に「韻槩」
1758　宝暦八年　『南郭文集』に「物夫子著述書目記」「韻槩」
1763　宝暦十三年　文雄没
1772　安永元年春　『三音矩』　識語　新正秀（九州大学文学部蔵）
1773　安永二年夏五月　『韻鏡古音正図』　有馬正邦（彦直）序
　　安永二年秋重陽　『韻鏡古音正図』　有馬正邦（彦直）識語
1774　安永三年夏　『韻鏡古音正図』　野口長通（伯通）序
1775　安永四年秋九月　『解経秘蔵』　東海寺尾正長序
1781　天明元年閏五月　『解経秘蔵要略』　東海寺尾正長字子長序（同夏刻）
1785　天明五年正月　『解経秘蔵』　刊　皇都書林六肆と「浪花大野木市兵衛」
　　天明五年夏五月　『解経秘蔵』　石井一貫堅（鏡山）序
1786　天明六年丙午三月刊の『韻鏡反切名乗即鑑』（廣瀬幽閑末流　加州金澤　多田秀洞識）、序「東海」は寺尾東海か（三沢諄治郎（一九五一））。浪華書肆河内屋喜兵衛
　　天明六年十二月　小田真卿『韻鏡一家言』識語
1788　天明八年八月『陰符経摘玄』『黄帝陰府経指玄』開版出願（この時以降次頁以前に寺尾東海没――『漢文学者総覧』は安永中とするが誤）
1796　寛政八年夏五月『解経秘蔵』羽富　謙　伯益（羽謙）「解経秘蔵大旨」述「此書既に梓行すれども世に學ぶ者少し」（刊記　天明のものに加え、皇都書林　京御幸町御池下ル町菱屋孫兵衛板）
1799　寛政十一年霜月　尾形貞齋『唐韻指迷』小田真卿
1801　享和辛酉　文雄『磨光韻鏡余論』利法例言

注

（1）近世人名録集成、勉誠社。
（2）『開版御願書扣』では残っていない。「陰符経摘玄」も同じ。
（3）『大阪本屋仲間記録』第十七巻二四〇頁では「韻鏡古音正圖」。
（4）『国書総目録』で「大阪府石崎」が「安永四版」となっているが、大阪府立中之島図書館石崎文庫本も天明五年の刊記があり、安永四年は序の年記をとったものと思われる。
（5）岡井慎吾『日本漢字学史』で、「此書既に梓行すれども世に學ぶ者少し」とて態々大旨の一篇を添へたも皮肉だ」と評されている。

（6）『日本漢字学史』に引く、岡井氏による訓読。
（7）ここでの「音」は頭子音の意味であり、頭子音と韻母の高低を比較することで上昇・下降を示しているわけである。
（8）劉復『四声実験録』。
（9）劉復『四声実験録』、小西甚一『文鏡秘府論の研究』、金田一春彦『国語アクセントの史的研究』、高松政雄『日本漢字音概論』など。
（10）『日本古典文学大辞典』「康熙字典」の項（倉田淳之助）による。
（11）四声についての引用は元文の増補の部にあるが、康熙字典の他所からの引用は、元文の増補でない、享保の原刊本にも見える。
（12）解題（日野龍夫）では「『韻鏡』の注釈書（恐らくは宝永二年刊の『韻鏡諸抄大成』）の用語を見出しのように標記して、それについて説明を加えた巻である」とするが、『韻鏡諸抄大成』であるとの認定の根據は不明である。
（13）岡井慎吾「論語徴にあらはれたる音韻論」（『柿堂存稿』）もあるが、『韻槩』等との関連は見出しがたい。
（14）「此れ甚だ秘する所なりといへども枉げて公世を慮る」とある。

参考文献

岡井慎吾（一九三四）『日本漢字学史』明治書院
三沢諄治郎（一九五一）『韻鏡諸本並に関係書目』著者自刊
湯沢質幸（二〇〇六）「近世韻学における呉音漢音の分類と韻鏡―徂徠と文雄―」『筑波大学地域研究』第二七号

付記

本稿は、第三四回中部日本・日本語学研究会（二〇〇三年五月一〇日 刈谷市産業振興センター）で発表したものを発展させたものである。引用に際して、片仮名を平仮名にあらため、漢字も通用の字体に改めたが、「韻槩」の「槩」字など、もとの字体を残したものもある。本文中に示したものの他に、『解経秘蔵』は、家蔵本・九州大学蔵本・大阪府立中之島図書館本等によった。

校正時付記

平声を「無低昂」とするなど、四声の調値に言及する記述が、湯浅重慶『韻鏡問答鈔』に見られた。貞享四（一六八七）年の刊であり、『康熙字典』よりも古い記述である。

（おかじま・あきひろ　本学大学院准教授）